この世をば 上

永井路子

新潮文庫

この世をば（上）

新潮文庫　　な－13－6

昭和六十一年九月十五日　印刷
昭和六十一年九月二十五日　発行

著者　永井路子
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六一五一一一
編集部（〇三）二六六一五四四〇
振替東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Michiko Nagai 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-129206-X C0193

新潮文庫

この世をば

上巻

永井路子著

新潮社版

3681

目次

男とは……七
首よりも……五二
今宵来る人……八六
深泥が淵……一一三
風の精……一四六
影絵……一九九
あしのうら……二三四
離洛帖……二七七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

花と地獄の季節……三三九
後宮明暗……三八〇
腥風の荒野……四一〇
「一声ノ山鳥」……四六八

この世をば

上巻

男とは

それは遥かかなたから、かすかに伝わってくる海鳴りに似ていた。

はじめは、あるかなきかの、気づかなければうっかり聞き洩らしてしまいそうな小さなささやき……。気まぐれに梢に触れてゆくそよ風にも近い。が、一時の気まぐれではないことは、やがてはっきりしてくる。

かすかではあるが、そのささやきはやまない。遥かな沖から岸辺をめざす波のように　確実に、ゆるやかな波動を伝えながら、少しずつ、倫子の身に近づいてくる。

そうなったとき、ここ土御門の邸では、侍女たちの衣ずれの音が少し高くなる。廊を渡る彼女たちは何となく足早になるのだ。邸の中に一種の活気がみちはじめる。

ひそひそ話。

しのび笑い。

倫子にはさとられまいとしているその気配が、しだいに昂まってくると同時に、父と母の間に、何やら曰くありげな内緒話が、しきりに交わされるようになる。

日頃温厚な父の雅信の声音が思わず高くなって、

「いや、そりゃあそうだが」

言いかけるのを、
「しいっ」
いつになく強い調子でたしなめる母の穆子。
しかし、邸の中には悩みごとをかかえた暗さはない。どこか華やかで、そわそわしていて、邸にただよう秘密めかした雰囲気を楽しんでいる趣きでもある。
その中で唯一の例外は倫子だ。
彼女はその秘密の輪の中に入るのを許されない。侍女たちは、いつもと違った眼付で彼女を見るくせに、
「あの、ちょっと」
その秘密のもとを尋ねようとすると、一瞬早く、するりと身をかわして、倫子のそばから逃げてしまう。
しかし、その間も海鳴りに似たどよめきはやまない。やまないどころか、いよいよ倫子の身近に迫って波頭を躍らせ、いまにも白いしぶきをあげて、ざざっ、と足許に飛びこんできそうになったとき！
瞬間、ぴたりと波動は止む。
掻き消えたように邸内のどよめきは失せ、邸は日頃の静かさに戻る。
何度、このどよめきと不自然な静止を倫子は経験したことか。
そして、二十四歳のいまは、そのどよめきの正体も知っている。

「恋文でございますよ、姫様あての……」

忠義顔した乳母の丹波に打ち明けられるまでもないことだった。何回か、しかるべき男からの恋文が届くのだが、倫子の手許に届けられるより前に、父と母の相談の末「おことわり」されてしまうのだ。

奇妙な肩すかしをくわされたような、みたされない思いもないではない。

そして、また、いま……。

海鳴りはかすかに聞えはじめている。

二十四歳という年齢はもう決して若くはない。早ければ十二、三歳、少なくとも十五、六になれば女は婿を迎える。それも、そのころは女が嫁ぐのではなくて、婿を迎えるのがふつうなのだが、そういえば、例の海鳴りに似たどよめきが、倫子の身辺にはじめて近づいたのも十四、五のころだったろうか。

――だから格別私が女として劣っているというわけじゃないのだわ。

そのころのことを思いだして、ひそかに心を慰める思いがある。が、その第一回目の恋文などは、父母の手で、あっさり握りつぶされた。

「まだ、姫に婿をとるのは早すぎる、と殿さまが仰せられましてねえ」

とは幼いときから付添って世話をしてくれている丹波の語ったところである。

「殿さまは、まあ、姫さまを、七、八つの幼な子のように思っていらっしゃるんですよ」

このときは母も同意見で、求婚者はそっけなく見送られた。だから、倫子はその恋文の主

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

がどんな男か全く知らない。

その後、二度、三度、と恋文さわぎはくりかえされたが、そのつど父母の意見があわず話は立ち消えになった。

父の不承諾の主な理由は相手の家柄である。

「あいつの家筋はよくない」

出世の見込が少ないというのである。

母の理由は男の素行にかかっている。

「あの方は色好みだから……。倫子が泣きを見ることになるのじゃないかしら」

当時の結婚の形態は不安定なもので、婿入りをしたからといって、男はその家の妻ひとりと結ばれるわけではない。それ以前から通っていた女性も同様に「妻」であり、またその後に好きな女性ができて、そこに入りびたり、めったに前の家に寄りつかないこともしばしばある。それが母には気がかりなのだ。

げんに父の雅信にも何人かの妻がいることを倫子は知っている。それでもいま、父はほとんど母の許で過すことが多いのだが……。

――お父さまとお母さまは二十一も年が違う。お父さまはお母さまをかわいく思っていらっしゃるのだ。

年頃がくればそのくらいのことは察しがつく。それに雅信のほかの妻たちには女の子がいない。女の子は穆子の産んだ倫子とその妹だけなので、晩年の子である二人に対して、雅信

はむしろ盲愛に近い溺れこみ方を見せた。倫子はそれをときにはわずらわしく思うこともある。

「よい家柄の家の男を」

という気持はわかるが、父の目にかなう男はなかなかいない。何しろ、父は宇多天皇の孫。臣籍に降って源を名のって以来、官位はすでに従一位左大臣。

——お父さまが偉すぎるのだわ。

わが家より家柄のよさそうな家はありそうもない、と倫子はうんざりする。

ところで——。

この秋、例の海鳴りがひびいてきたとき、丹波はそっと言ったのだ。

「姫さま、今度はきっと……」

例によって、侍女たちの足音が高くなる。

緊張をはらんだささやき。

声をひそめての含み笑い。

父と母との額をあつめての密談。

波はいよいよ倫子に近づいてきたようだ。

そうだ、こんどこそ！

倫子は息をつめた。が、波頭が白くくだけて、ざざっと押しよせる前に、一段と高まったのは、父と母との声であった。

「ならん。断じてならん」
父雅信六十八歳。年をとって気短かになっているのだろう。少し離れた局でひそかに話しあっている声が几帳越しにすっかり聞えてしまうくらい高くなった。
「そんなことおっしゃったって、あなた」
母の穆子の声は、まだ落着きを失ってはいない。
「何といったって、倫子も二十四ですからね」
「二十四？　それがどうした」
「私はその年にはもう倫子を産んでおりました」
「う、う」
雅信は反撃の言葉を捜す。
「倫子は小柄だし……。顔だちも愛くるしい。そなたの二十四のときより、ずっと若く見える。うん、十七、八といってもいい」
穆子はさらりとうけながす。
「いくら若く見えたって、年は年。婿どのをきめないでおくのはかわいそうです」
「そうかといって、ろくでもない男を迎えるわけにはゆかん。いや、ここまで待ったからには、何としても家柄のよい、見込のある男を見つけぬことには」
「だから、この方なら」
穆子は膝をすすめる。

「お家柄だって悪くはないじゃありませんか」
これまで恋文を届けてきた中では、一番いいはずだ。なのに、夫が今度の話になぜ反対するのか。
「それに……」
穆子は最後の切札を持ちだす。
「あの方の父君は摂政になられたことだし」
摂政といえば天皇の後見、いや天皇代行といってもいい。人臣の辿りつける最高位である。それに不服顔する夫の方がどうかしている。
ところが、その話を持ちだしたとたん、雅信はひどく不愉快な表情になった。
「とにかくあの家の息子はいかん」
「どうして」
「虫が好かん」
「そんなことおっしゃったって……」
「それに摂政の息子といったって、あの男は末っ子だ。出世の見込はまずないな」
がんとして諾かない夫の前で、穆子は戦術転換をはかるよりほかはない。
「ともかく、倫子にお文を見せてみましょう」
「な、なんと」
ぎょっとして立ちあがる雅信より、年若な穆子の方が行動はすばやかった。さらさらと廊

をすべるように走って倫子の許に急いだ。
「姫、姫……」
恋文というものを、目の前につきつければ、どんなに驚き、気もそぞろになることか。もうそれだけで娘の心はきまってしまうのではないか。
穆子の作戦はそれだった。
「姫、ちょっとこれをごらん」
辛うじて夫より一足先に倫子の局に飛びこんだ彼女は、手にした白い紙片を、娘の前にちらつかせた。
「お文ですよ」
「お文？　どなたの」
倫子の反応は思いのほかに冷静だった。
「まあ読んでごらん」
白い小さな手が静かにさしだされる。白い文が開かれる。首をかしげるようにして紙面をみつめる……。しかし、穆子が期待するほどの変化は、倫子の上には起らなかった。とりわけ頬をあからめもせず、じっと紙面を見守っている。
――まあ、この子ったら……。
いささか拍子抜けする思いである。
――男の方からの文をいただいても、うれしくないのかしら。

それは穆子の思い違いであった。何度か邸のどよめきに感づき、胸をときめかせ、そのつど、厳重にさわぎから隔離され続けていれば、いまさら驚けというほうが無理であろう。しかし母親は娘の心には気づかない。いつの世にも親というものはそんなものであるが。

――これが恋文というものなの。

「なかなか御返事がいただけない」というような文章があるところを見ると、これを書いた男性は前にも自分に文を届けたことがあるらしい。

――どういう方なのかしら……。

いまひとつ心がときめかないのは、倫子には、文をよこした男のおもかげがどうしても想像できないからである。

狩衣は香染か？　いや若い方だからもっと華やかな青朽葉か、それとも秋の初めにふさわしいおみなえしか……。それに烏帽子をかぶせてみても、かんじんの男の顔が浮かんでこない。

はて、男とはどういうものか？

目も口もないのっぺらぼうの顔しか思い描けないこのもどかしさ。ぼんやりしていると、ふいに手の中の白い文が、ふわふわと飛びたった。

「あら……」

いや、羽根がはえたのではなかった。近づいてきた父が、するりと取りあげたのだ。

「ふん、大した紙も使っておらんな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton